

「ごみと私の関わり方」

栄町に越して30年になります。2人の子供たちも巣立ち、今は主人と2人暮らしとなりました。私というより我が家のゴミの分別が始まったのは、子供が小学校の時、環境問題がテーマになり分別する事により、いかにゴミをリサイクルし出さないで済むかなど、話し合いから実践に移した事から始まりました。町から出されている「家庭ごみ」と「資源物」の分け方・出し方例を参考に、かなり細かく分別して出すようにしました。(巣立った2人の子供たちも、それぞれの地域で分別を頑張っているようです。)

ペットボトルやトレイなどはスーパーへ、洋服はリサイクルショップへ持って行くようにし、生ごみはEMボカシを利用し、畑を借りて使用するようにしました。特に家庭から出る生ごみが一番燃やすのにコストに係ると聞いたので、なるべく生ごみを出さない事にしています。

又、コーヒーやだし用パックなどは乾燥させてから出すようにし、ごみ軽量に心がけています。資源物も紙類などはシュレッターにかけた紙やレシートなどの紙も出すようにしています。ゴミは燃やしてしまえば、だだのゴミですが、きちんと分別し再利用すれば資源として使えると思います。生ごみの再利用としてEMボカシを使ったごみのリサイクルを進めている埼玉県戸田市など、参考にすることが沢山あります。モデル地区を自治会などに協力していただき、まず実践していく事が必要です。

栄町は特に財政的に大変逼迫していますので、少しでも支出を減らしていけるよう、町民への啓蒙活動を行政のかたと一緒に進めて行けたらと思います。

昨年「印西クリーンセンター」移転計画が持ち上がりましたが、今ある炉もしくは新しく作られる炉にしても、どこの行政区も細かく分別し、なるべくゴミを出さない知恵と工夫が求められていると思います。



ごみと私の関わり方

ごみ問題とは

ごみという一般的な見方はどうしても嫌われ者という感じが強い。処理施設建設に当たっては反対運動が起こりがちであるが、ごみは我々自身が出したものであり、その処理に当たっては、我々自身で責任を持ってやる必要がある。最近のごみに対する見方も変わって来ており、ごみをエネルギー源として捉え、ごみの焼却熱を利用して発電、温水製造等行われている。セメント工場でもかなりの量のごみを原料および燃料として引き取っている。ダイオキシンやNO_x等の排出に関する環境制御技術も昔からすると格段に進歩している。ごみ処理施設が有効エネルギー施設と考えられるようになって来ている。

ごみ処理の基本計画策定に当たっては、人口予測、一人当たりのごみ排出量の設定が問題になるが、他の人口等の基本計画との整合性、世の中の趨勢等を考慮に入れた計画が必要であろう。もちろんいわゆる3R (Reduce, Reuse, Recycle)を考慮してごみの減量、再利用、再生利用する配慮は大事である。このためには市等による啓蒙活動は不可欠である。

隣接市との清掃工場対策協議会委員としての活動

ここで私の隣接市との清掃工場対策協議会での活動を説明したい。30年程前、我々がニュータウンに入居した時、隣接市の清掃工場の煙突が近くに建ちだした。反対運動が起こり、ほどなく住民側と隣接市との間で対策協議会が出来、以来30数年も続いている。最初の炉は2塔流動層型で悪臭がひどかったが、その後この炉は実績のある流動床型に変更され、順調に運転されている。私は早い時期からこの協議会委員になり、主に焼却プラント、熱回収等を中心に運転状況等の監視に留意している。これだけ長い期間協議会が続いているのは双方の良好な信頼関係が築かれているからだろう。その根幹は情報を隠さず公開するという姿勢であると思う。

おわりに

このような活動では、大学で環境衛生工学関係を専攻したこと、その後の仕事に於いてプラント建設に携わり、プラントに付随する海外での自家発電設備や環境保全設備の設計、建設、試運転に従事したことが役立っている。また最近ではJICA等の水道・下水道調査団にも加わり、基本計画の重要性を認識している。従い、このような機会に於いて、これらの経験、知識を生かせたらと思う。

ごみと私の関わり方

1.焼却施設設計への参画（ゼネコン在職中）

某自治体「ごみ焼却場」の設計施工入札において、焼却炉プラント会社とゼネコンの共企業体への建築構造設計者として参画。

2.エコ建材開発及び普及（ゼネコン及び関連企業在職中）

ごみ資源化への参画はゼネコンの社会的貢献の重要課題である。

資源化成功の3要素として品質、コスト、市場構築があるが、多くのリサイクル品は市場拡大が出来ず、多くの資源化基礎技術の活用がなされていなかった。マテリアルリサイクル品の巨大市場としての可能性は建材であるが、建設業界としての取り組みは積極的とは言えない。一方、南洋材（ラワン合板）の最大需要先であった日本の建設業界は、欧米から熱帯雨林破壊によるCO2増大への責任を厳しく追及されてきた。このような背景を受けて、複数の企業とエコ建材の共同開発を並行して行った。対象とした資源ごみは、古紙（週刊誌、漫画本、その他）、布繊維（カーペット、カーテン、古着、その他）、そして容器包装プラスチックである。複数メーカーと商品化に成功し、特許も取得したが、その中でも、容器包装プラスチックは、ビジネスモデルとして筋がよかった。そこで、ゼネコン大手5社に対して、エコ建材研究会の立ち上げを提案し、メーカーとともに開発に取り組み、施行実験を繰り返しながら製品化し、エコプロダクツ大賞も受賞した。またエコ建材の開発・普及を目的とした[]も立ち上げ、普及に努めた。

3.船橋市北部清掃工場問題対策会議・事務局長（白井市内加盟37団体）

同工場は立上げ時、多くの技術的問題点を市民の専門家から指摘されたが、改善されな
いまま稼働された。しかし、稼働7年後には炉の入れ替えを余儀なくされた。そこで、
船橋市では燃焼工学の学者やプラントメーカーの社員や排気ガスの管理責任経験者等多
くの市民専門家を入れた、上記対策会議を白井市民とともに立ち上げ、154回にも及ぶ
運営協議会を継続している。地元住民と工場の協働による良好な関係は他の模範となる。
その運営協議会事務局長として参画した。そして今年度も事務局長として参画する予定。

4.ごみ処理施設を考える印西・白井・栄連絡会メンバーとして

次期中間処理施設の整備基本計画について学んできた。また、組合から直接ご教示い
きながら、意見交換もさせていただいた。焼却施設行政の歴史やプロジェクトの進め方
等についても理解している。先進自治体の工場視察もしており、中間処理施設のあるべ
き姿について、個人的コンセプトは持っている。

白井市議会環境・建設常任委員会で「熱回収施設プロジェクトの進め方」について説明。
「ごみと暮らしを考えるシンポジウム」のパネラーとして市民に説明。

ゴミと私の関わり

1 はじめに

ゴミとは、人類が生活する上で発生する不要物で、ゴミをゼロにする事は、不可能であろう。生活上、不要なゴミでも、適切な分別・リサイクル等により、ゴミは有効な資源にもなる。ゴミの分別処理の目的は、分別・回収により大切な資源をリサイクルできるという事、ならびに回収不能なものであっても、焼却でエネルギーとして回収できるという事であろう。ゴミの有効活用・再資源化は、人類の営みで今後とも最も重要な課題の一つであろう。

2 ゴミの分別に於ける3R(Reduce, Reuse, Recycle)の達成

ゴミの一次分別は、家庭で実施される。ゴミ減量の為の、3Rのレベルは、一次分別者である家庭での分別に依存するところが大きい。家庭でのゴミの分別方法を容易にし、明確化する事は、3R推進の必須事項と考えられる。

3 ゴミの分別の明確化

ゴミの分別の資料も種々用意されている様であるが、解りやすく明確化する事が必要である。例えば、紙の分類で「和紙」は、回収不能で、理由は、繊維が長いので云々との事であるが、一次分別の家庭では、どれが「和紙、洋紙？」と悩んでしまう。レシート類も同様であろう。家庭では、分別方法に迷っているゴミが種々有る筈で、具体的な分別方法を解りやすく提示する必要がある。

4 生ゴミの減量

最終的にリサイクル出来ない可燃ゴミは、焼却処理されることになるが、この中でも、水分を多量に含む生ゴミは、出来るだけ水分を減らして減量する必要がある。生ゴミの減量化方法についても、具体的にまとめて、住民にPRして行く必要がある。

5 ゴミの有料化と不法投棄

ゴミ処理の有料化という話も聞かすが、やはり最大の問題は、不法投棄であろう。印西市内でも自転車で走ると不法投棄が散見される。大型ゴミについては、有償化も仕方ないが、生活ゴミの有償化は、不法投棄の増加の要因となるので慎重に対処願いたい。

6 まとめ

ゴミの分別方法を分かりやすく明確化して「全員参加」で「3R活動を推進する」事がゴミ減量の基本的な考え方であり、行政には更なる積極的な推進、ならびに応援をお願いしたい。

以上

「ごみと私の関わり方」

私は、ごみ問題を改めて考えるならば、昭和三〇年から昭和五〇年頃にかけて、もともとエネルギーは自給していた集落の暮らしていた各々の家庭では、囲炉裏や蒸釜に、一方行動成長に大都市かになり生活環境も変わりつつ自動車も電気製品も増え続ける時代であった。自動車も排気ガス規制、公害問題等世の中が段々に規制が厳しくなり、大手企業は海外に国内も大手スーパーも増え個人経営は厳しく、それでも世の中は進んでいくのである。戦後世の中を良くするために国民の頑張りで良くなっただけですが今は世界各国どうでしょうか。今後色々な分野の技術研究も進んで行くと思いますが全ての面で再利用出来る研究も願いたい。

人が生活していく上で、ごみは必ず発生するものであり、これらを焼却処理した場合でも最終的には焼却灰が発生し、いずれにしてもこれらを埋立てする場所、最終処分場が、

必要となる。地球上では、人々が出すごみが
増え続けている。しかし、この世に人間が生
きている限り、ゴミが減っていくことはない
だろう。どうすれば、この世からゴミを減ら
していけるだろうか。ゴミ減らす、なくす、
という考えを捨て、ゴミを大事な資源と考え
例えば、古くなつたTシャツを家の掃除をす
る雑巾として再利用する。どこの家庭でもよ
く見られる光景である。また、エコバッグや
詰め替え用の商品などので、無駄なゴミを無
くすことも重要である。このような、些細な
ことからゴミを減らしていけば、いつかは、
ゴミの量が減っていくと思います。時間と
根気が必要です。私は、ゴミを減らすには、
生ゴミは堆肥化に、リサイクルと再利用を住
民と各自治会、行政と町ぐるみで財源に、結
び付ける事を真剣に努力したいと思ひます。

H25年3月15日

印西地区環境整備事業組合

印西クリーンセンター技術班 御中

提出者名

住所

論題 「ごみと私の関り方」

S59年、私は印西市(当時町)木刈に引っ越して来ました。入居当初、駅から自宅までの間に住宅はなく、駅近くの大きな建物を見て安堵しながらも、その建物がクリーンセンターと知り、なぜ駅に近いのかと不思議に感じたことを覚えています。これが「ごみと私の関り」の原点かもしれません。

H12年に勤務先の[]を定年退職するまでは、地域と交流のない生活でしたが、退職後は交流が増え地域問題にも取り組んでいます。研究所勤務のS48年頃、コンビナート近くの社宅で多くの子供が小児喘息で苦しむのを見た苦い体験から、今のクリーンセンター近辺の建物に住む多くの人への排煙の影響(特に幼児・高齢・病弱者)を危惧する一人です。そんな危惧の中で、H23年6月に「次期中間理施設整備基本計画」の建設予定地が「中央駅圏9住区業務施設地区内」に決定されたことを知り、ごみ処理施設

を考える印西・白井・栄連絡会に参加。メンバーとして計画内容を調査・分析し、結果や問題点を住民や関係先等に説明・指摘しました。又この計画の基である「印西地区ごみ処理基本計画 H21 年版」や昨年策定の「第 2 次印西市ごみ減量計画」及び関係市町のごみ関連資料等を集め、人口・ごみ量・設備能力等の内容を調査・分析し、その問題点や課題も説明してきました。ごみ焼却場は住民生活に欠かせない施設ですが、一方では多額の建設費用と排煙が生活環境に悪影響を及ぼしかねないと言う課題を有するために、可能な限りごみを減量化し、施設をコンパクト化せねばなりません。

「基本計画検討委員会」は焼却施設の基本事項を決める大事な場。是非、住民委員の一人として参画し、これまでの調査・分析作業等で得た知見や企業生活での経験・知識を活かし、住民が納得できる良い施設造りのために、建設的意見を述べたいと思っています。以上

平成 25 年 3 月 17 日

印西地区環境整備事業組合
事務局長 様

印西地区ごみ処理基本計画検討委員会委員応募小論文

持続可能な社会の実現にあたってのごみ処理において、可燃ゴミの半分をしめる生ごみへの取り組みが肝要だと思う。

生ごみは生きているごみであり、他の廃棄物と違い、開放系である生態系への影響が大きく自然の法則にあった循環を考えていくことが大切になってくる。

わたしは、昭和 40 年代の公害とくに食品公害のころに子育てをした世代で、子どもに素性のわかった安心な食べ物の摂取をころがけてきた。いろいろ学習した結果それは、自然の循環システムにのっとっていない行為がもたらしていることがわかった。わたしは有機農業の普及が将来の世代のためになることを確信したが、生産性の低さや病虫害や雑草対策など課題も多かった。約 20 年前生態系の底辺を構成する微生物層のちがいによって生態系ピラミッドの多様性の貧弱さと豊かさを招いている理論を、琉球大学の比嘉照夫教授から学んだ。これは、有機農業普及の課題を解決する一助になることも確信した。

台所から出る生ごみは、有用微生物の発酵剤で腐敗させないので悪臭もなく、土をそだてる良い微生物をふやすえさとして家庭菜園や花づくりにかかせない大事な宝ものになった。可燃ゴミの約半分を占めるという生ごみをゴミ収集車に出すことはなくなり出すゴミの重さはなく頻度も減った。ゴミ減量に繋がると生ごみ処理容器に補助金つける自治体もふえてきた。

生ごみをリサイクルしたい方が多く普及のための団体設立の必要に迫られ設立に携わった。その中で農業利用につなげる方法を試験するため、一農家あて約 50 軒として 150 軒の家庭生ごみを回収し、環境省の基金を使って設置した粉碎乾燥機にかけたものを EM ボカシ肥料にした。農業利用に十分な資材となることも解った。

国の食育推進ボランティア表彰をうけた吉田俊道さんは、生ごみ先生として有名だが、全国の保育園・幼稚園・学校などで生ごみでの元気野菜づくりで元気人間づくりに成果をあげている。さまざまなファイトケミカルをふくむ生ごみだから元気な野菜が育ちそれを食べる子どもたちのインフルエンザ罹患が減ったり、低体温や便秘が改善したり、集中力や免疫力が向上することが証明されている。

このようなことは、今や多くの人が認知することとなったが、地域の生ごみを循環させて地域の元気づくりにつなげる仕組みが必要になってきたとおもう。

ごみと私の関わり方

1. はじめに

関東圏3大ニュータウンで最も新しい千葉ニュータウン・小倉台に鎌ヶ谷市から20年前に引っ越して来ました。当時東風が吹けばダイオキシンの話題もありましたが、今は国の基準より大幅に改善されており何の心配もありませんでしたが、昨年印西市長選挙で印西クリーンセンター(以後印クリと略す)の更新が大きな話題となり、このときから印西地区ごみ処理との関わりがスタートします。

2. 職務経歴

電気の課程を卒業し、三菱電機中央研究所に入社、10年後に本社重電計画部に移り、インフラ・社会システムと言われる、地域開発、ビル、道路、空港など主に公共施設を担当、有料道路の料金システムであるETCの導入にタッチしたことから、最近の、7年間国交省の財団法人「駐車場整備推進機構」に在籍しました。

職務上、電気関連社会システムの検討、計画、設計、製作、運用、保守、更新のフルメニューを経験してきました。なおその間社会システムに関連する国・関連機関の検討会の委員、事務局の職務経歴もあります。

3. ごみ処理との関わり方

板倉印西市長が誕生してから、印クリのごみ処理に関心を持つようになりました。印クリについては、ホームページで前回の検討会の報告書、議事録を読み、関連の熱供給センターのホームページなどで概要を勉強し、印クリの現地見学をさせてもらい、丁寧な説明をうけました。又印クリ以外のごみ処理場の見学にも参加しました。

今回の検討会で決めた内容に委員としての責任を果たす意味において、委員会後の計画、設計、施工、運用、保守など一連の任務にもタッチしていきたい。

考慮すべき第1は、印西地域住民で、第2は印クリを休みなく毎日管理運用する組合関係者で、第3に技術の先進性・社会環境の変化への対応である、即ち公益を常に意識して、委員会の担任する事務を推進していきたい。

4. おわりに

印クリに近い小倉台に住み着いて20年、昨年勤務先の国交省関連の財団法人が解散し、自然退職しました。過去の職務上の経験ノウハウを生かし、地元地域社会に貢献できる最適なものとして、本検討会の住民委員に応募します。

成果品の基本計画書が現在と将来の印西地域にマッチし、日本国のごみ焼却場更新のモデルになるよう努力します。

以上

ごみと私の関わり方

ひと昔前の大量生産・大量廃棄の時代から、社会の持続可能性を追求した生活様式・行政施策へと大きく軌道が修正され、先進諸国ではこの考え方が定着している。

一住民の立場でごみ処理を考える時、まず思いあたるのが3Rの徹底である。自身の行動で見ると、用済み新聞紙のリサイクルによる市指定ごみ袋との交換、不要書籍の青空市場での処分、トレイ・ペットボトルの資源ごみ回収、マイバッグの使用、剪定枝の庭への埋め戻しなどがある。それでもごみ排出は避けられない。

自分とごみとの関わり方を「処理施設」を含めて考えると、先ず3Rを徹底すること。次に「処理施設」については、1) 運営にかかる環境保全の配慮が充分なされていること。2) (運転・補修・更新などにかかる) 運営費が適切であること。3) 安全で安定な運転ができる施設であること。4) 運搬車の通行が住民に支障がないこと。5) 最終処分地への負担を考慮していること。などが課題として上げられよう。

特に、1) に関しては施設周辺の環境保全のために必要十分な設備と運転が、2) に関しては受益者負担の原則に照らして丁寧な説明ができる施設であることが、3) に関しては施設補修時でもごみを受け入れ続けることが求められる施設の性格を考慮することが、5) に関しては排出物(灰)の減容・安定化努力とともに処分地の環境保全の観点からの配慮が、それぞれ求められよう。

市民生活・企業活動に密に関わりを持つ課題ゆえ、関係者の参加と納得の上で計画が進展することが望まれる。

平成 25 年 3 月 21 日

「ごみと私の関わり方」

昨年の印西市市長選挙戦では、ごみ焼却場の新設・移転が争点の一つとなった。それまで私は「印西地区環境整備事業組合」が印西市・白井市および栄町のごみ焼却を担っている事を知らなかったが、事業組合がどのような機能を持っているのか、何故、2市1町で運営しているのかを説明できる人は少ないのではと思う。

数年前の OECD のデータによれば、日本のごみ焼却場数はダントツの世界一、1人1キログラムのごみを毎日出しており、計算上、年間で1家庭から1~2トのごみが出ているとのこと。ごみ焼却量は欧州の環境先進国の10倍以上と最悪な日本。そのような状況の中で、千葉県のごみ処理量やシステムは全国都道府県でどの程度のレベルなのだろうか？印西市・白井市・栄町は、全国市町村でどの程度のレベルなのだろうか？

行政は、ごみ処理事業の現状や政策について、もっと周知徹底する必要があるように思う。

一昨年の福島原発事故後、原発の可否（安全性・発電用エネルギーコスト等）について、国論を二分する様相の議論が続いている。これだけ意見・考え方が分かれるテーマは他にないのではないかと。ただ、原発について語られる際、出口の問題、使用済み核燃料処理の問題についての視点が充分でないように思う。

ごみ問題についても、入口（消費社会での大量のごみ発生）と出口（ごみ処理）のインバランス問題と捉えることができる。まずは、入り口でのごみを減らすことだ。ごみはただで処理してもらえるとという間違った意識もなくすことだ。ごみは我々の毎日の生活でとても身近な問題である。心がけ次第で、ごみは少なくすることができそう。ごみ捨て禁止の掲示板を全く無視して、道路脇にビニール袋に詰め込まれたごみが無惨にも大量に捨てられている場所がいまだに、見られる。自分さえよければ、みんなやっているからという意識も捨てなければならない。

ごみの減量化を目指し、数値目標を決めて、一人一人ができることから始めること、それを行政が後押しすることが、まずは、ごみ問題解消に向けての重要な第一歩と思う。